

第45回

「地球温暖化」をはじめとする環境問題がますます身近になる一方で、世界の国々が賛同できる国際枠組みの構築は困難な状況にあります。

このような状況下で対策が急がれる中、国際社会はどのように取り組むべきなのでしょう。

CSRの最先端アメリカでの実体験をもとに日本企業向けのCSRコンサルティングを行うコーポレートシチズンシップ代表の雨宮氏から世界で行われている地球環境問題解決への取り組み等について、ご紹介いたします。

コーポレートシチズンシップ 代表取締役 雨宮 寛氏



持続可能な社会に向けたハーバードの取り組み

持続可能な社会に向けたハーバード大学の取り組みを紹介したいと思います。今年で15回目となるハーバード社会起業大会（“Harvard Social Enterprise Conference (SECON 2014)”）（画像1）が3月29日(土)、30日(日)の週末に開催されました。この大会はハーバード大学の二つの大学院（ハーバード・ビジネス・スクールとハーバード・ケネディ・スクール）の学生達が中心となり運営しています。15回目の記念すべき大会に、私も今回で5回目となるスタディツアー「ハーバード社会起業大会プログラム」を旅行会社のエイチ・アイ・エスと一緒に実施して参りましたので、その内容をお伝えしたいと思います。

「ハーバード社会起業大会プログラム」は、文字通り前述のハーバード社会起業大会に参加することが主目的なのですが、大会だけでは実際の社会ビジネスを運営する方々の生の声を聞く機会が多くありま

せん。そこで、同プログラムでは、ニューヨークとボストンで実際に社会ビジネスを行っている起業家や実践者にお会いする機会を設けています。同大会で最新の社会ビジネスの状況や国際的な現状を知り、そして同時に、ニューヨークやボストンで実際に社会ビジネスを行っている人たちに会うことで、社会ビジネスの実態を把握しようとするツアーです。今回のツアーでは、貧困層の子供達に質の高い教育を提供している非営利機関「ティーチ・フォー・アメリカ（TFA）」（画像2）や公立学校でありながら地元コミュニティや保護者が積極的に学校運営に携わり、かつ寄付金活動も自主的に行う中高一貫チャーター・スクールのKIPPアカデミー・リン校（画像3）、社会ビジネスの起業家が集うインパクトハブ・ボストンおよびケンブリッジ・イノベーション・センター、社会的責任投資の草分けドミニ・ソーシャル・インベストメンツ、クリーン・エネルギーの普及に新た



（画像1）ハーバード社会起業大会（SECON2014）の受付案内版



（画像2）ティーチ・フォー・アメリカのマサチューセッツ支部の人事総務部長のアマンダ・サイダーさんの講演

なビジネスモデルの導入を目指すベンチャー企業クリーン・パワー・パークス、そして非営利機関や財団等に社会的影響力を生み出す事業戦略をアドバイスするセンター・フォー・セオリー・オブ・チェンジに訪問し、経営陣や実践者の方々と話をしてきました。一方、大会は二日間の日程で、様々な社会課題をテーマに多くのパネル、ワークショップ、ディベートが行われました。

多くの学びがあり、新たな発見があり、そして新たなネットワークを構築することができたツアーでした。今回のツアーを通じて最も印象的だったことは、「失敗から学ぶ」というフレーズを多くの人々が言っていたことでした。社会ビジネスのベンチャーであれ、どのような組織でも、失敗は付きものです。失敗から学ぶことは考えている以上に多くのものがあり、次の挑戦に役立つというものでした。失敗を恐れずに挑戦することは、もちろん重要なのですが、失敗そのものと正面から向き合う勇気が大切で、その勇気があれば、失敗から多くのものを学び、次に生かせるというメッセージでした。米国では社会ビジネスの分野も、創業して10年、20年というプレイヤーが増えてきました。第三者的に順風満帆のように見えるプレイヤーも、多くの障害を乗り越え、そして、時には失敗をして、事業を継続してきたのだと思います。15回目の大会、そして5回目となるツアーの節目に、当たり前なのですが、あらためて失敗について考えることができた機会となりました。

もう一つの話は、ハーバード大学のドリュー・ファウスト学長が4月7日に発表した「気候変動に立ち向かう ("Confronting Climate Change")」というレター(<http://www.harvard.edu/president/news/2014/confronting-climate-change>)です。この3月に横浜でIPCC（気候変動に関する政府間パネル）が開催されていたので、気候変動に人々の関心が集まっていたタイミングでした。ファウスト学長のメッセージそのものの解説は致しませんが、ハーバード大学が取り組むべき3つの事柄を上げています。日本の大学のみならず、組織全般に参考になるのではないかと思いますので、この3つの取り組みを簡潔に記します。一つ目の取り組みは大学の強みである学際的に研究体制を構築することです。気象学の特定分野に加えて工学、法律、公衆衛生、デザイン、ビジネスといった他分野を包括した研究

体制で、非再生可能エネルギー社会から再生可能エネルギー社会への進化を促進することです。二つ目は、気候変動にどのように組織として臨むのかということを示すモデルとなることです。温室効果ガスの削減目標を設定し、各専門領域の大学院の代表者で構成されるタスクフォースが定期的にモニタリングを行っていきます。ハーバードでは2008年に校内エリアで排出される温室効果ガスを2016年までに2006年比30%削減を目標に置きました。2014年現在、削減率は21%まで進んできていますが、今後数年に30%削減に到達するにはどのような方法があるのか、タスクフォースが検討し、提案していきます。

最後の取り組みが投資行動です。ハーバードは世界の大学で最も大きな大学基金を運用する投資家でもあります。ハーバードは投資家として持続可能な社会の形成に貢献するために、国連が進めている責任投資原則を批准する予定です。また、投資先の企業の温室効果ガス排出量などの環境関連情報の情報開示を進めるカーボン・ディスクロージャー・プロジェクトの気候変動プログラムに署名する予定です。

今回はハーバード関連で二つの出来事を記しました。これらの試みが成果として現れるには、まだまだ日を要すると思いますが、世界的に注目を集めて

いる取り組みになりますので、引き続き目を離さないでしっかりと追っていきたいと思います。



(画像3) KIPP アカデミー・リン校の高校の廊下には大学の旗が貼られていて、生徒に大学進学への希望を持ち続けることをサポート

画像1、2、3：
ワールドスタディ提供

略歴

コーポレートシチズンシップ代表取締役。DWMアセット・マネジメント；DWMインカムファンズおよびスワンクキャピタル日本代表。明治大学公共政策大学院兼任講師。CFA協会認定証券アナリスト。NPO法人ハンスオン東京理事。コロンビア大学ビジネススクール経営学修士およびハーバード大学ケネディ行政大学院行政学修士。クレディ・スイスおよびモルガン・スタンレーにおいて資産運用商品の商品開発を担当。2006年コーポレートシチズンシップを創業。「あなたのTシャツはどこから来たのか？」(ビエトラ・リボリ著 東洋経済新報社)「暴走する資本主義」(ロバート・ライシュ著 東洋経済新報社)「ジェンガ 世界で2番目に売れているゲームの果てなき挑戦」(レスリー・スコット著 東洋経済新報社)などを翻訳。「アショカDVD・社会起業家シリーズ」監修。